

ます。

### 3. えひめの地域づくり・まちづくり

これからの稿は、私が直接かかわったものは少なく、また、平成2年に愛媛県に帰ってから見聞きしたものが多くあります。そこで感じたことを独善的な判断で書いたものです。当事者の人にとって見たら、事実と合わないことも含まれていると思いますが、ご容赦していただければと思います。このとらえ方に対しての批判は私が受け止めることとします。

#### (1) 第一世代

えひめのまちづくりにおいて、広域合併前の時代のまちづくりを便宜的に第一世代と位置付けます。この世代のまちづくりは、行政と住民の距離が近い中で進められてきています。

この時代は、都市と地方という両極ができて、都会に行った方が便利だし、裕福になるような幻想のもと、人や物や金が大都市に集中していった時代でした。そのままでは、地方はつぶれてしまう。それは都市にとってもよくないことだ。都市のために地方の活性化をという、都市住民のニーズに合った地方づくりが行われた時代でもありました。それに向けてのアンチテーゼとして地方の個性を生かした地域づくりが唱えられ、地方の独自性を活かした、地方のための明確なビジョンに



内子町町並みの様子

よるリーダー先導型地域づくりが行われてきました。その地域づくりは、愛媛県でも、全国に名をはせた内子町の町並み保存、山並み保存活動は代表的なものでした。そこで行われた地域づくりは、町並みの在り方、農業を中心とした中山間地の在り方、内子座を中心とした芸術文化のまちづくりなどがテーマで、これがいいんだという信念に満ちたビジョンに対して住民の共感をどう得るのかといったような取組みだったと思います。そこに立ちはだかる種々の課題を乗り越えていかれたことは素晴らしいと思います。

旧双海町における夕日をテーマにしたまちづくりについても、同様のまちづくりだったと思えます。双海町の場合は、具体的な実在する手に触れられるような地域資源でなく、夕日といった抽象的なものを地域資源として取り組み、ユニークなアイデアを実現していったものでした。まちづくりとしては、特筆すべきものだったといえます。いずれも、行政という公益を実現する立場で行われたもので、このようなまちづくりの事例は、旧城川町のかまぼこ板、久万高原町の木を主体としたまちづくりなど枚挙にいとまがないほどです。



シーサイド公園からの夕日

一方、同じ時期に行われた、当時の五十崎町の小田川における多自然型工法による河川整備の取組みは、住民グループからおこったまちづくり活動です。これからの河川整備の在り方を示唆するような取組みでした。多自然型工法について、スイスまで出かけて行って学び、前例のないまちづくりを認めない行政という厚い壁を打ち破りなが